

## ○ 病害虫防除法（ピーマン）

### （ア）青枯病 *Ralstonia solanacearum*

（防除のねらい）  
（耕種的防除法）

トマトの項参照

### （イ）うどんこ病 *Oidiopsis sicula*

（防除のねらい）

本菌は、トウガラシ、オクラにも寄生するため、付近に発病株があれば注意する。発病して落葉した葉も伝染源となるので早めに除去する。施設栽培では換気を図る必要があるが、乾燥し過ぎても発生しやすくなる。病勢が進むと防除困難になるので発病初期の防除に努める。

（耕種的防除法）

- （1）ハウスでは密植を避け換気に努める。
- （2）着果負担の増大による草勢低下は、発生を助長するので、適正な肥培管理に努める。

### （ウ）疫病 *Phytophthora capsici*

（防除のねらい）

多発ほ場ではウリ科作物にも発生するので、輪作作物の選択に留意する。ハウス栽培では地際や根部が侵され立枯症状を示すことが多い。排水不良の過湿状態で発生するので、その対策と予防的に薬剤散布を行う。

（耕種的防除法）

- （1）激発地では連作を避ける。この場合ナス科、ウリ科作物との輪作は避ける。
- （2）トマトの項参照

### （エ）菌核病 *Sclerotinia sclerotiorum*

（防除のねらい）

（耕種的防除法）

キュウリの項参照

### （オ）苗立枯病 *Rhizoctonia solani*

（防除のねらい）

（耕種的防除法）

キュウリの項参照

### （カ）軟腐病 *Erwinia carotovora subsp.carotovora*

（防除のねらい）

（耕種的防除法）

（化学的防除法の注意事項）

トマトの項参照

### （キ）灰色かび病 *Botrytis cinerea*

（防除のねらい）

（耕種的防除法）

（化学的防除法の注意事項）

キュウリの項参照

トマトの項参照

### （ク）斑点細菌病 *Xanthomonas campestris pv.vesicatoria*

（防除のねらい）

（耕種的防除法）

トマトの項参照

**(ケ) 斑点病 *Cercospora capsici***

**(防除のねらい)**

ハウス栽培の11～12月及び3～4月に発生が多いが、育苗期にも発生する。病斑が進展すると落葉する。気温20～25℃、多湿条件で発病しやすい。病原菌が侵入してからの防除は困難なので、予防散布を基本に行う。

**(耕種的防除法)**

- (1) ハウスでは換気や通風を良好にして多湿を防ぐ。
- (2) 罹病した茎葉、果実は伝染源となるのでは場外に持出し処分する。

**(コ) 黒枯病 *Corynespora cassiicola***

**(防除のねらい)**

10～11月頃から認められ、12～2月は一旦終息するが、3月以降気温の上昇とともに急激に発生程度が高まる。葉だけでなく、果実にも発生するので被害が大きい。多湿と高温（発病適温28℃）条件で発病しやすい。

10～11月の生育初期の防除が重要で、早期発見と早めの防除に努める。特に前作で多発したほ場では発生に注意する。

**(耕種的防除法)**

- (1) ハウスでは換気や通風を良好にして多湿を防ぐ。
- (2) 罹病した茎葉、果実は伝染源となるのでは場外に持出し処分する。
- (3) 支柱などの生産資材の消毒を徹底する。

**(サ) モザイク病 CMV, PMMV**

**(防除のねらい)**

病原ウイルスはキュウリモザイクウイルス (CMV) とタバコモザイクウイルス・トウガラシ系 (PMMV) が主体である。CMVはモモアカアブラムシ、ワタアブラムシなどにより伝播されるので、アブラムシ対策を講ずる。PMMVは種子伝染、土壌伝染、汁液伝染をするので総合的な対策を必要とする。

**(耕種的防除法)**

- (1) 健全種子を用いる。育苗は寒冷紗被覆をする。
- (2) 定植時に汚染の可能性のある株は取り除くか、別に植えておき管理する。
- (3) 発病株を認めたら除去する。症状の軽いものは、管理を別にして接触伝染を避ける。

**(シ) ミナミキイロアザミウマ**

**(防除のねらい)**

露地越冬が困難で、施設→露地→施設のサイクルで発生を繰り返す。これを施設栽培の段階で断ち切ることが重要である。薬剤に対する感受性低下の事例が見られるので、薬剤防除だけに頼らず、耕種的防除法を組み入れた総合防除を行う必要がある。

**(耕種的防除法)** キュウリの項参照

**(化学的防除法の注意事項)**

- (1) 青色粘着シートを設置し、成虫の早期発見と初期防除に努める。
- (2) 新芽や花の中、果実のへたの下など葉のかかりにくいところに潜んでいるので、薬剤は丁寧に散布する。
- (3) 多発してからの防除は困難なので、少発生時から定期的に防除する。
- (4) 抵抗性が発達しやすいので、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。

**(ス) ミカンキイロアザミウマ**

**(防除のねらい)**

寄主範囲が広く、野菜類、マメ類、花き等、多くの作物を加害する。ミナミキイロアザミウマと外観は似るが、低温耐性が強く、露地でも越冬が可能である。また、薬剤に対する感受性はミナミキイロアザミウマとは異なるので、注意が必要である。早期発見に努め、発生初期から防除を行う。

**(耕種的防除法)**

- (1) ほ場や施設の周辺部の雑草でも繁殖する。除草を行うなど環境整備に努める。
- (2) 成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部は寒冷紗などを設置する。

**(セ) タバココナジラミ**

**(防除のねらい)**

被害は作物によって異なり、ピーマンでは吸汁害とすす病の発生による果実の汚れが問題となる。薬剤に対する抵抗性が強く多発すると防除が困難なので、初期防除に努めるとともに、防虫ネットの利用など総合的な防除に努める。他はトマトの項を参照する。

**(耕種的防除法)**

トマトの項参照

**(ソ) アブラムシ類**

**(防除のねらい)**

ワタアブラムシとモモアカアブラムシがみられ、発生が多いと落葉を促し、果実が汚れたり肥大が悪くなる。施設では有翅虫の侵入防止対策を実施する。早期発見に努め薬剤は生息数の少ないうちに生息部位にかかるように散布する。

**(耕種的防除法)**

- (1) 幼苗を寒冷紗で被覆し、有翅成虫の飛来を防止する。
- (2) シルバープラスチックフィルムや銀色ストライププラスチックフィルムなどでマルチを行う。また白色テープを畝上に3本程度張りわたすと有翅成虫の飛来が少なくなり有効である。

**(化学的防除法の注意事項)**

抵抗性が発達しやすいので、作用性が異なる系統の薬剤のローテーション散布に努める。

**(タ) ネキリムシ類**

**(防除のねらい)**

カブラヤガとタマナヤガが発生し、多くの野菜・花き類、雑草などを加害する。土壌中で中齢～老齢幼虫が越冬し、4～5月に成虫が出現する。年に2～3回発生し、春から秋までつねに各ステージの幼虫が見られる。若齢幼虫は葉を食害するが、齢が進むと昼間は土中にひそみ、夜間出てきて根際を切断する。雑草跡地などに植えつけると、被害が多発しやすい。

**(耕種的防除法)**

- (1) 産卵期にほ場を裸地状態にして、産卵を防止する。
- (2) 大きい苗を植える。
- (3) 植付後に被害株を発見したら付近の土を掘って捕殺する。

**(化学的防除法の注意事項)**

雑草が繁茂し被害を受けるおそれのあるほ場では、定植時に粒剤・粉剤を予防的に使用する。

**(チ) オオタバコガ**

**(防除のねらい)**

**(耕種的防除法)**

**(化学的防除法の注意事項)**

} トマトの項参照

**(ツ) タバコガ**

**(防除のねらい)**

**(耕種的防除法)**

**(化学的防除法の注意事項)**

} トマトのオオタバコガの項参照

**(テ) ハスモンヨトウ**

**(防除のねらい)**

**(耕種的防除法)**

**(化学的防除法の注意事項)**

} トマトの項参照

**(ト) チャノホコリダニ**

**(防除のねらい)**

ナス、トマト、ゴマ、スイカ、インゲンなどにも発生する。芯止まりや奇形果、傷果になる。露地栽培では夏季に発生し、ハウス栽培では9～10月の育苗期から発生する。

本種は卵から成虫までの発育期間が短く、短期間に急激に増殖するので、特に発生初期の防除が重要である。

**(耕種的防除法)**

(1) 育苗は、茶やピーマンなど、本種の寄主植物の近くで行わない。

(2) 雑草から移動するので、ほ場周辺の除草に努める。

**(ナ) ハダニ類**

**(防除のねらい)**

施設栽培での発生加害が主体である。高密度になると葉が黄化し、落葉するので、防除は発生初期に十分行う。

**(ニ) ネコブセンチュウ**

**(防除のねらい)**

**(耕種的防除法)**

} キュウリの項参照